

第 2 回 分離派 100 年 研究会

2012 年 11 月 24 日（土） 14 時—17 時 30 分

京都大学 楽友会館 1 階 会議室

「大衆」の時代

—1910 年代から 1920 年代にかけてのオランダの建築的状況—

本田昌昭（大阪工業大学 准教授）

堀口捨己は、1923 年 7 月ヨーロッパへ渡り、フランスやオーストリア、ドイツといった諸国を訪れている。様々な事情や制約はあったであろうが、堀口がいかなる国を巡ったかということが、当時の彼の興味のある所、あるいは、当時のヨーロッパにおける建築の「地勢」を表しているとも言い得る。限られた滞在期間において堀口は、オランダには 2 度足を運び、帰国後の 1924 年には、目の当たりにした同国の建築について『現代オランダ建築』を著すこととなる。

奇しくも堀口が大学に入学した 1917 年には、オランダのレイデンにおいて『デ・スタイル』誌が創刊される。その一方、1910 年代中頃以降オランダでは、建築家の関与の下、低所得者層のための集合住宅の建設が推進されていく。両者、すなわち、前衛的な芸術運動と社会政策は、決して乖離していたわけではなく、主題化される「大衆」という視座において重なり合うものであった。

「すべての人に住宅を」

—ヴァイマル期ドイツにおける労働者住宅建設と建築家

中江研（神戸大学 助教）

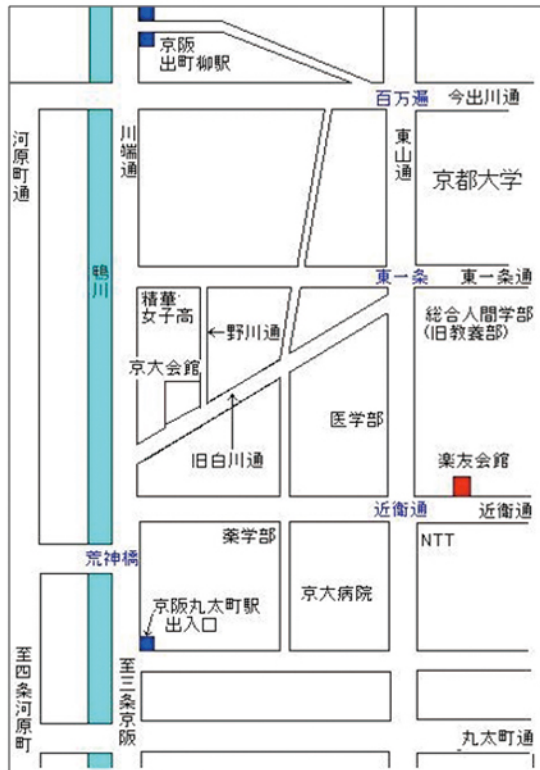
ヴァイマル期末期となる 1920 年代末から 30 年代初頭、山田守、蔵田周忠、吉田鉄郎らの日本人建築家たちが「新建築」の見聞としてドイツに遊学する。彼らが訪れた時期のドイツは、極度の住宅窮乏状態を脱すべく、労働者用住宅の大量供給に向けた闘いの真っただ中であつた。山田はフランクフルトで最小限住宅を主題とした第 2 回 CIAM を体感し、蔵田はブルーノ・タウトらが設計したベルリンのジードルンクに住み、吉田はドイツ人建築家に『日本の住宅』の出版を勧められ、帰国後にそれを果たした。当時の日本人建築家たちが見ておくべきものと捉えたドイツの住宅建設をめぐる状況と潮流を探っていききたい。

- 入場無料
- 定員 20 名（参加ご希望の方は、下記までご連絡ください）
法澤（京都大学田路研究室）ta-hosawa@archi.kyoto-u.ac.jp
- 研究会後、懇親会を予定しています。

京都大学楽友会館

京都市左京区吉田二本松町

075-753-7603



市バス 「近衛通」下車 徒歩すぐ

- JR 京都駅から：乗車約 30 分
市バス 206 〈東山通 北大路バスターミナルゆき〉
- 阪急河原町駅、京阪四条駅から：乗車約 20 分
市バス 201 〈祇園・百万遍ゆき〉
市バス 31 〈東山通 高野・岩倉ゆき〉
- 東山三条から：乗車約 10 分
市バス 201 〈百万遍・千本今出川ゆき〉
市バス 206 〈高野 北大路バスターミナルゆき〉